

吉田松陰その③ わたくし 私と公 おおやけ

玉木文之進は松陰の叔父で、山鹿流兵学師範の家を継いだ松陰を幼少から厳しく指導しました。ある時、文之進は畑仕事の傍ら、松陰を端座させて四書五経の素読をさせていました。松陰が、ほほにとまった虫をはらい落そうとした時、文之進はにわかに関色を変え、松陰を殴打し続けたといひます。素読をすることは殿様から命じられた役割を行うことで、公。我がほほにとまった虫をはらうことは、私。私を公に先んずる人間にするわけにはいかないので折檻をしたと言ひてします。文之進は、後に各地の代官職や郡奉行を勤めました。郡奉行は、現在の市長ほどの職ですが、善政をしき名奉行とうたわれたそうです。職を退いたのち、再び松下村塾で指導していましたが、前原一誠が起こした萩の乱に養子や門弟たちが加わった責任をとって自害しています。

文之進の厳しい指導のもとに成長した松陰は、藩内で高く評価され江戸遊学を許可されます。松陰は、書籍を買うために、食費を切り詰め、みそや梅とご飯を食べるだけでおかずはほとんど購入していません。ただ、大福が好物で一か月に6回大福を買ったと記録しています。そして『大福が我慢できない自分自身にがっかりする。』と松陰は書き残しています。しかし、大福一個は現在の貨幣価値で60円から70円と言われていますから、月に500円に満たない出費を松陰は恥じていることになります。久坂や高杉らが正妻がありながら浮いた話が多いのに、松陰は生涯独身で、獄中に出会った高須久子という女性に心をよせていたこと以外に女性に関する話はありません。

文之進にせよ松陰にせよ、どうしてここまで自己の欲や思い（私）を犠牲にしてまで、藩（公）のために生きようとしたのでしょうか。当時の長州藩は実石高百万石、特に下関は北前船の寄港地として物資と富と文化が集まる西日本の拠点都市でした。長州藩は、幕府に従い藩を保とうとする保守派と、最終的には倒幕をめざす改革派が幾度も政権交代をしています。しかし、藩主は毛利敬親のままです。このことは『君臨すれど統治せず』という英国の立憲君主制に似た考えが藩内に醸成されていたことを示しています。藩という組織が法人として認識され、法人（公）のために尽くすという、近代以降の行政組織や会社組織の倫理観がすでに確立していたことになります。

松陰は、欧米の強大な軍力から我が国の独立を守るという国民としての立場に立って行動し塾生を指導しました。日本国民という認識は、当時はほんの一部の知識人に限られ、国とは、藩やお国（備中や備前など）を意味するのが一般的な認識でした。松陰の一生は、公のため私を押し殺して痛々しいほどに清廉なものだったと言えます。

公という使命は、公立学校の教職員にもあるわけですが、ここで自分のことを書き加えることはとても恥ずかしくてできません。ただ、子どもたちの幸せを祈って懸命に生きるという教職員に課せられた公は、松陰が果たそうとした公と同様に大切なことだと思ひています。